

中原御殿と小川庄左衛門

—安土桃山時代—

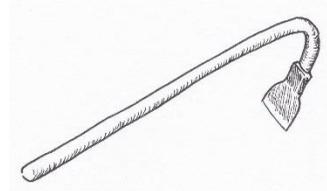
「そなたが、玉井帯刀か」
たまいたてわき

「はい、もとは北条家の家臣でしたが、今は百姓ひやくしやうをしています」

代官だいかんの伊奈忠次いなただつぐは、目の前にひかえる男に声をかけました。

ここは豊田せいうんじの清雲寺。文禄四年（一五九五）の金目川の洪水で建物が水につかり、このときはあちらこちらを修復しているところでした。

「そなたを呼び出したのは他でもない、このあたりに詳しく、顔もきくそなたに頼みたいこ



とがあつたからだ」

「私でお役に立てることであれば」

「この清雲寺は、わが殿とくがわいえやす（徳川家康）が、鷹狩たかがりのときに休憩所として使わせてもらっていたが、今度のように洪水の被害にあうのならこれからも心配だ。どこかほかに代わりになるようなよい場所はないか」

「ここより少し南に行った中原という所にかつて砦がありました。そこなら水につかることもないかと」

「よし、そこに新たに館やかたを作れ、工事はそなたが指図さしずせよ。また、これからはそなたも名前を新しくし、あらためて徳川のためにつくしてくれ」

このときから、玉井帯刀は小川庄左衛門と名乗ることになりました。

さつそく、庄左衛門は豊田の里の中から何人かの者たちを引き連れて、館の建設工事



に取りかかりました。

工事のために彼らが中原に移り住んだことから、このあたりは当時、豊田新宿しんしゅくとも呼ばれました。

庄左衛門たちの働きによって館は完成し、これを中原御殿なかはらごてんと呼びました。慶長元年

(一五九六)のこととされています。

御殿の近くには、代官陣屋しんや(この地域を治めるためのお役所)なども造られました。庄左衛門は、伊奈忠次に言いました。

「この御殿は、周りに何もなく、人々の

往來はげしい東海道からも丸見えです。お殿様が泊まる場所としては、不用心です。このさい、周りに木々を植えて御殿を隠すようにしてはどうでしょうか。また、この辺りは海に近く砂地です。この砂が飛んで害をなすことも防げます。」

「そうなれば、周りの田畑にもよい影響があるというのだな。それで木は何を植える」

「松がよいかと思えます。松は荒れた土地にも強いと聞きました。また、枝なども燃えやすく薪たぎとなります」

「なるほど、薪や肥料となる下草したくさなどの草刈り場として村人の生活の助けにもなるということか」

「また、松は木材としても活用できます。木材は、堤防ていぼう工事にも欠かせませんし、ここは須賀湊すかみなとにも近く、そこから運び出せば、すぐに江戸へと送ることもできます」

庄左衛門の言葉に忠次は深くうなずきました。

「なるほど、ここに御林おはやしを作ることはいいい考えだ。さつそく植林に取りかかれ。それから、今後この御林は、そなたを管理責任者の御林守おはやしもりに任命するので、しっかりやるように」
庄左衛門は深々と頭を下げました。

庄左衛門は、ほかに近隣の村々に命令を伝える触口ふれぐちという役にも付きました。

家康は、鷹狩の時だけではなく、江戸から上方かみがた（京都や大坂）などへの行き来にも、この中原御殿にたびたび宿泊しました。

御殿は、明暦三年（一六五七）には引き払われましたが、御林は明治まで残りました。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸